

東公民館

子どもたちとお飾りづくり

神崎 友澤敏男

12月22日(土)、神崎集会所で、小学生と父母の会、老人会の三世交代交流のお飾りづくりが行われた。

山草と藁が老人会の有志によって用意され、39名の小学生がグループに分かれた。日本の伝統としてのお飾りの意味を聞き、作りはじめた。今回はじめて参加し、やや緊張気味の低学年。縄を編うのにまだまだ不慣れな中学年。お飾りづくりの経験があつて、落ちついてしている高学年。

さまざまな表情をした子どもたちの一人ひとりに合った指導のおかげで、終わりごろにはほとんどの子どもが数個のお飾りを作っていた。お飾りを二つ三つと作っていくうちに、あるグループでは、自分の作った「しめなわ(連縄)」を横に広げて、神社や神棚で見かけたことに気付いた者。これを見れば形が「お飾り(輪飾り)」なんだとうなずく者。その他、しめなわの上で輪じめるなど、

▼グループに分かれてお飾り作り



いろいろな形のお飾りを思いついたり、工夫している子どももいた。

どの子どもたちも自分なりのものを作り上げて満足しているようであった。

不安そうな気持ちで参加していた子どもたちが、いきいきとするその様子を見たりと、私たちも満足感を味わい、来年も続けていきたいものだと思つた。

1時間のお飾りづくりもあつという間に終わり、お母さん方が作ったおもしろいぜんざいをいただいた。

▼ぜんざいに舌鼓を打つ子どもたち



「また来年作ろうね。」という老人会長さんのことばを後に、自分が作ったお飾りとキャラメルを手に分けた。次は北伊予小学校五年生女子の感想文の一部である。

……私もしめ縄づくりでうれしかったことが二つあります。一つめは、前はできなかったけど、五年生になってできたこと。二つめは、友だちと協力してできたこと。三つめは、お父さんとお母さんに「よくできたね。」とほめられたことです。また機会があつたら、しめ縄づくりをしたいと思えます。

補導センターだより

ものを横から見る

松前町青少年補導センター所長 山本宗一

正月にNHKの山根アナウンサーが、デザイナー内田繁を訪ねた「美と出合う」という番組を見た。その中で内田繁が次のようなことを言ったのが耳に残った。

「日本の建築は、座つてはじめて良さがでる。日本の文化は座る文化である。座るということは眺めることである。眺めるとは左右を見ることであり、西洋の上下の文化とは異なるものである。『また、自分には子どものころから畳に座つて生活する習慣が身につけており、どうしても作品がその身体感覚で出来上がってしまう。』とも言った。そのとき不謹慎にも、ジベタリアンも日本人だなと内心北叟笑んだ。

冗談はさておき、現代の若者を見る眼に内田のことばはそのヒントを与えてくれたらと思つた。

現在のわれわれの生活は、得てして上から下へ、下から上へものを見る習慣になじんでいる。その結果として、現代の若者を見る目も「近ごろの若い者は…」になりがちである。ここでこんなことを考えてみた。

ほんとうに近ごろの若者は不可解でとらえどころがないのだろうか。これは、現実を直視し、見極めることをしない人の発することばではないだろうか。この人は、金や地位や名声、学歴などの何かに頼りすがっている人ではなからうか。また、自分のことが本当はわかっているのに、わからない振りをしていっているはなからうか。

いつの世でも、若者をすべてわかって大人はいない。自分の身に即して若者を部分的に理解すればよいのではないか。

そのために、若者を横から見直してみよう。横から見るといことは、視線を若者の高さにもつていくことである。そして、横からものを見るときは、自分自身をもう一度眺めかえすことに他ならない。